Ⅳ-46　積雪寒冷地域の高齢者の交通特性

秋田大学　正　員　清水浩志郎
秋田大学　正　員　木村　一裕
秋田大学　学生員　○古山　広功

1．はじめに

わが国では人口の高齢化が急速に進み、それに伴って高齢化社会に対応した種々の交通対策が検討されている。しかし、高齢者の交通行動は、地域によっても異なり、とくに秋田のような積雪寒冷地域では、夏期と冬期で利用交通手段が異なるなど、冬期積雪期の対策が重要であるといえる。すなわち、身体特性が低下していると言われる高齢者が冬期間に外出するには、多くの危険を伴いこれを回避するために、外出を断念するなどの現象がみられている。そこで本研究では、冬期における高齢者の外出状況を把握し、高齢者の外出断念行動と交通手段の選択性について明かにすることを目的としている。

2．高齢者の外出特性

(1)高齢者の外出特性

一般に身体の諸機能は、加齢に伴って低下することが知られており、高齢者の身体特性を考慮するとその外出特性は、身体的なハンディキャップや交通環境に大きく影響するものと考えられる。とくに積雪によって夏期から冬期の交通環境が著しく変化し、危険の増大する地域においてはその障害はさらに大きくなると考えられる。そこで冬期における高齢者の交通挙動を把握するために秋田市に在住する50歳以上の中・高齢者を対象としてアンケート調査を実施した。調査は留置方式により昭和62年９月から10月にかけて行なった。表－１は、交通環境の変化に伴って高齢者が冬期にとる外出行動を示している。交通手段の転換や外出回数を減らすという夏期とは異なった外出行動をとる割合を外出目的の中で多かった買物、団体活動、通院でみると、買物が52%、団体活動23%、通院では32%である。そのうち、交通手段を転換する割合は、通院、団体活動で23%、買物では14%、外出回数の減少および外出の断念は、買物38%、団体活動11%、通院では８%となっている。このことから、冬期の交通条件の悪化に対して団体活動や通院目的では、交通手段を転換して外出している人が多く、買物目的で外出回数を減らしていることがわかる。

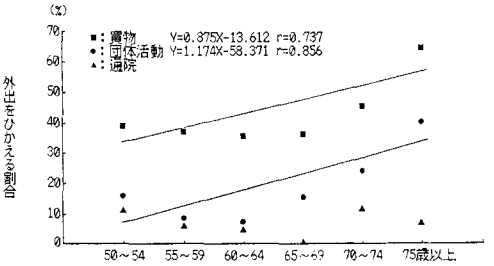
表－１　高齢者の外出状況

	夏期同様	交通手段を代える	外出を減らす	外出をやめる	合計
買　物	48.2	14.0	27.4	10.4	100
団体活動	66.7	22.4	6.7	4.2	100
通　院	68.1	24.3	2.8	4.8	100

単位：%

(2)年齢別にみた高齢者の外出特性

交通環境の変化による高齢者の外出特性の中で、外出回数を減らすという行動に注目し、年齢別にみたのが図－１である。これによると加齢に伴い外出を控える割合が増加していることがわかる。とくに買物と団体活動では、年齢との相関係数は0.737、0.856という値になった。高齢者の身体状態が加齢とともに著しく衰えることからも、買物や団体活動で60歳を越えると大きく外出を控える割合が増加するものと考えられる。



図－１　年齢別外出を控える割合

そして高齢者の外出を控える程度を年齢別に一週間の平均外出回数で示したのが表－２である。買物、団体活動目的では、加齢に伴い外出回数の減少していることがわかるがその減少傾向には違いがみられる。買物目的では、50歳代の外出回数の減少も比較

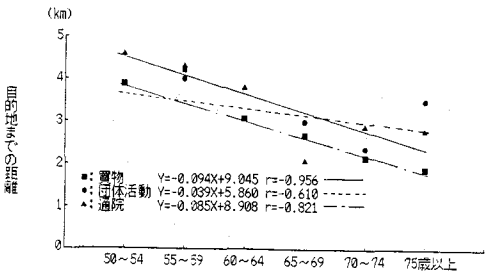
的大きく、高齢者層との差もそれほど大きくはない。これに対し団体活動での外出回数の減少は、50歳代では非常に小さいが、高齢になるにしたがって減少が大きくなっていることがわかる。また通院においては、各年齢層とも外出回数の低下は非常に小さい。

表－２　年齢別一週間の平均外出回数

	買　物		団体活動		通　院	
	夏　期	冬　期	夏　期	冬　期	夏　期	冬　期
50～54歳	2.6	2.0 (0.77)	1.5	1.4 (0.93)	1.2	1.2 (1.00)
55～59歳	3.1	2.5 (0.81)	1.7	1.7 (1.00)	1.1	1.0 (0.91)
60～64歳	2.9	2.4 (0.83)	1.7	1.6 (0.94)	1.0	1.0 (1.00)
65～69歳	3.0	2.4 (0.80)	2.4	2.1 (0.88)	1.5	1.5 (1.00)
70～74歳	2.8	2.1 (0.75)	2.2	1.8 (0.82)	1.9	1.7 (0.89)
75歳以上	3.1	2.3 (0.74)	2.8	1.6 (0.57)	1.2	1.2 (1.00)
全　体	2.9	2.3 (0.79)	1.8	1.6 (0.89)	1.3	1.2 (0.92)

単位：回/週　()内は夏期に対する冬期の比

そこでこのように目的によって外出を控える程度が異なっている原因を分析するために、目的地までの距離を外出目的別に分析した(図－２)。これによ

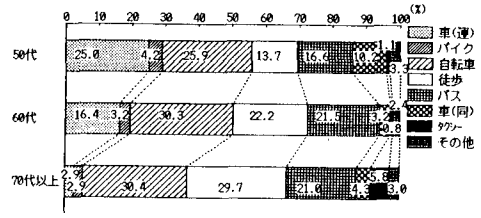


図－２　年齢別目的地までの距離

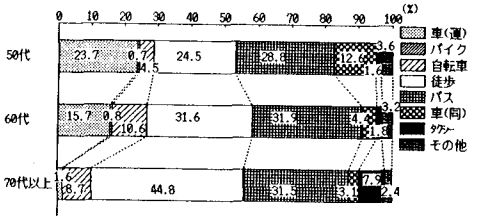
ると、高齢者の目的地までの距離は年齢が上がるにつれて、その距離は短くなることがわかる。団体活動では目的地までの距離は近くなってはいるが、年齢による距離の減少は少なくなっている。これは年齢が上がることによる身体特性の低下に対して、目的地までの距離がさほど変わらず、冬期の交通環境の悪化とも相まって、高齢者の外出を妨げているものと思われる。これに対し、買物、通院目的では加齢に伴って目的地まで距離も近くなっており、団体活動に比較して、外出をあきらめることは少ないものと思われる。つまり、高齢者は目的地までの距離を短くすることで、その交通需要をできるだけ満たそうとするが、それが困難な場合に遠くへ出かけることはそれだけ危険が増大することにつながり、結果的に外出を控える行動をとるものと考えられる。

(3)利用交通手段

次に冬夏期別の交通手段の利用状況(図－３、４)をみると、高齢者の冬期の交通手段としては、自転車の利用が減少し、徒歩やバスへの依存度が高く、70代ではとくにこの二つが重要な交通手段となっている。積雪地域では、歩行環境が悪化することを考えれば、バスや乗合タクシーなど公共交通の整備の重要性が問われることになると思われる。



図－３　夏期における交通手段



図－４　冬期における交通手段

３．むすび

冬期の高齢者の外出状況は、買物や団体活動目的で、加齢に伴い外出回数が減少する傾向がみられることがわかった。また、このことは加齢に伴う身体的なハンディキャップの増大と、冬期交通環境の悪化が、外出回数を減少させる原因と考えられる。

冬期の外出回数の低下は、今後、高齢者の単独世帯が増加傾向にあることから高齢者の孤立化をもまねきかねないことであり、冬期の安全性の確保は重要な課題であるといえる。また、高齢者が冬期に利用する交通手段では、徒歩やバスの占めるウエイトが高いことがわかった。

【参考文献】雪国秋田の現状と雪対策(昭和60年)